九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

重刊本「捷解新語」の巻のグループ化 ： 「ガ行音の表記法」「御（おん）」「儀」などの現れ方から

趙, 南徳
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/11906

出版情報：語文研究. 72, pp.1-11, 1991-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

重刊本「捷解新語」の巻のグループ化

——「ガ行音の表記法」「御（おん）」「儀」などの現れ方から——

趙　南徳

1　はじめ

捷解新語には1676年刊のいわゆる「原刊本」の他に，「改修本」（1748年刊），「重刊本」（1781年刊），および「漢字仮名まじりの表意・表語式に改められた」，いわゆる「捷解新語の末書」としての性格を持つ「文釈」（1796年刊）が今日に伝わっており[注1]，同じ内容でありながら時代，体裁，性格を異にする。これら四種類の捷解新語については，従来いろんな面で詳しい研究がなされてきたが，まだ多く問題点が残されているようである。

本稿は，四種類の捷解新語のうち，特に重刊本をとりあげ，重刊本の内部に言語差が見られることを指摘しようとするものである。

2　重刊本の性格の一面

捷解新語の各巻を内容別に分けてみると，次のようになる。

Ⅰ（巻1～巻4）釜山においての役人たちの公貿易に関する対話

Ⅱ（巻5～巻8）「釜山—江戸」間の通信使行に関する対話

Ⅲ（巻9）釜山においての役人たちの日常に関する対話，日本の各道州郡の紹介

Ⅳ（巻10）釜山においての役人たちの公貿易と日常に関する書簡

＜表1＞内容の削除、及び添加の例数

巻	削　除	添　加	備　考
1	47		移　動
2	29	1	同
3	15		移　動
4	38		同
5	100	1	削　除
6	8	3	同
7	61	15	添　加
8	77	7	同
9	88		削　除
10	55	9	同
計	518	36	

原刊本，改修本から重刊本への改定にあたっての内容の削除・添加の仕方と上のⅠ～Ⅳのグループにはある程度，関連がありそうである。改修本と比較しての重刊本の内容の削除・添加は，大きい「○」で区切られた段落を基準として見れば，段落の単位で行われた全体的なものと，段落の内部で行われた部分的なものに分けて考えることができるが，この中で全体的なものを巻別にまとめてみると＜表1＞のようになる。（ついでに各巻の対話の終わりの部分の段組を改修本と比較して[注2]「備考」として表してみることにする。）

＜表1＞でまず，巻別の削除の例数を見ると，削除は全体518段落という相当な量におよび，特に巻5の100段落，巻9の88段落の削除などが目につく。注目されるの

は，巻4までは各巻50段落以下とすくなく，巻5以下は各巻50段落以上と多くの削除例が見られることである。ただ，巻6の場合だけは削除例8段落にとどまっていて例外的である。添加の場合の例数は全36段落を数えることができるが，ほとんどが巻5以下に集中していて内容の添加は巻5以下でより積極的に行われたことを窺わせる。また，各巻の対話の終わりの部分の段組を見ると，巻1と巻3の終わりの部分は，各々巻2，巻4の初めの所に移されており，巻5と巻9，巻7の終わりの部分は削除，もしくは添加され，終わりの部分の段組からも移動と削除，添加という異なった改修の動きを窺わせる。

外面的ではあるが，削除，添加，移動という観点から見れば，重刊本の改修の方向は巻4以前と巻5以下とである程度異なっており，また，それは内容の特徴によるグループ分けとある程度相関しているのが分かる。こういうことは改修本には見られない重刊本特有の性格の一面として上げることができると思う。重刊本を，巻順を重視し，また話しことばの場合と書きことばの場合とを区別して（巻10は書簡用の書きことば），かりにA（巻1～巻4）B（巻5～巻9）C（巻10／書きことば）の三つのグループに分けて，この改訂の仕方のちがいがことばの面にも関係していないか，以下すこし検討してみることにする。

3 「ガ行音の表記法」の現れ方

まず，重刊本における濁音「ガ行音」の表記法について考えてみることにするが，その前に，原刊本における濁音全般の表記法，および当時の濁音に関する事情について，先行研究から引用しながら，重刊本においての問題点を考えてみることにする。安田章（1960）に原刊本における濁音表記は次の三つの方法をとってなされたことが整理されている。

「（Ⅰ）濁音たるべき音節は，清音または半濁音の綴字で示し，その直前の綴字の末尾に，m・n・ŋのどれかを加え，示す。

（Ⅱ）（Ⅰ）のm・n・ŋを一綴字の中にとり込み，mp～・nt～・ŋk～のようにする。

（Ⅲ）一綴字（z）で示す。[注3]」

しかし，上記の濁音表記法は重刊本になると，「ガ行音」だけを残して「ザ・バ・ダ行音」の場合は，（Ⅱ）（Ⅲ）の表記の方に限定されるわけであるが，その事情について安田章（1960）に次のような記述がある。

『（Ⅰ）の方法が，なぜ，ガ行にのみ行われたのであろうか。中世末期頃の京都語で，濁音が，鼻音的要素を伴ない，その直前の母音を鼻音化したことは，キリシタンの記述からも周知の事実である。それによれば，特に，ガ・ダ行，時にはバ・ザ行音の直前にくる母音は，鼻母音に発音されたらしいのである。しかも，その，濁音を修飾していた鼻音的要素は，ザ・バ・ダ行の順序で失われ，『音曲玉淵集』が記すように，最後は，ガ行音にだけ存在していたのである。右の事実から，（Ⅰ）が，ガ行音表記にだけ採用されているのは，必ずしも偶然ではないと思う。即ち，本書成立頃も，一般的現象として，鼻音的要素が，ガ行音にあったと言えそうである。（Ⅰ）に対して，森田武氏は，「鼻母音を兼ね示したものであろう」とされたが，「あかがね」における，（Ⅰ）（Ⅱ）の両表記法を考えると，（Ⅰ）（Ⅱ）は同値と考えるべきである。ただし，改修本（本稿での重刊本）では，（Ⅰ）（Ⅱ）同値と言えるのは，ガ行に限ると思う。[注4]』

また安田章（1987）には，次のような記述がある。

『第２次改修の結果の重刊改修本では，この旧方式[注5]は，ガ行音にしか見られなくなっている。しかも，ガ行音ですら，ダ行音の一綴字方式移行に随伴するかのように，一綴字方式をも併用する。このガ行音一綴字方式は，原刊本において，文節初頭に限られており，ギョ・ゴ（御）と共に，例外はあるけれども，「五」の複合語に見えていたのが，第一次改修本（本稿での改修本）では，語頭の「御」に限定されてしまう。第二次改修の結果，その限定はやや緩和され，「逆風」にも見えるようになるが，文節初頭以外のガ行音をどのように表記したのか―重刊改修本（本稿での重刊本）の助詞ガについて見てみよう。そこでの，格・接続助詞あわせて115の用例を見るガは，巻一～巻四と巻五～巻九とで，その表記法式に差異が認められる。即ち，旧方式を採る前半に対して，後半は一綴字方式を採っているのである。「文言」（三15ウ）「品」（四22ウ）など，撥音に続き一綴字方式を採らざるを得ない場合ですら，kkで処理してŋkを採っていない。このように，前半と巻十を含めた後半とで対照的な語として，アガル・イカガ・オ蔭・限リ・儀・ナガラなどがある一方で，ゴト（毎）ニ・ゴトク・ゴロ（頃）・明後日・両国などは旧方式で一貫されている。[注6]』

本稿では，重刊本における濁音表記法の現れ方について，「ガ行音」だけ（その中でも，文節初頭以外の「ガ行音」表記だけを問題とする。従って，「御（ゴ）」などは考察対象から除外されている）を問題として考察してみたいと思うが，重刊本における「ガ行音」の表記は，上記の先行研究からも分かるように二つの方式をとって現れる。一つの方式は，原刊本から伝統的に用いられた表記法である。原刊本の場合は，「五」の複合語の，すなわち，二十五日１例・十五日２例・十五郡４例あわせて７例の以外は，すべて［ŋ―k］の形で表記されている。こういう方式を便宜上「原刊本式」と呼ぶことにする。もう一つの方式は，『倭語類解』[注7]の段階で，ほぼ定着されたと考えられる表記法である。『倭語類解』の場合，ケゴロモ・ジウゴニチ・スゴウ・ネゴウ・コナガキ・サルガキ・スギジュウ・ナガシの８例以外は，すべて［ŋk］の形で表記されている。こういう方式は，便宜上「倭語類解式」と呼ぶことにする。

重刊本では，この「原刊本式」と「倭語類解式」の両方式の表記がみられる。しかも，このように二つの方式をとって現れるのが，「ガ行音」に限っての現象であるというところに問題があるのは，すでに指摘されているとおりである。また，二つの方式の中で，どの方式をとったかの傾向の差が，巻１～巻４と巻５～巻10とで認められることもすでに指摘されているとおりである。いま，あらためて重刊本の「ガ行音」の表記法の現れ方を整理してみると＜表２＞のようになる。

巻のグループＢとＣの場合，「ガ行音」の表記にある傾向の差は見られなかったので，ＡとＢ・Ｃとの二つのグループに分けてまとめたが，＜表２＞は巻のグループ別に「ガ行音」表記が「原刊本式」である場合と，「倭語類解式」である場合とを区別して表し，また，各グループ・表記方式の別にその所属する単語を調べてまとめた結果である。各グループに各々所属する単語を，語彙別の偏りをも調べるために，各グループとの関連性を考え，更に区別したが，その各グループとの関連は，次のとおりである。

Ａ①：Ａだけにしか現れない語彙例。

＜表２＞重刊本の「ガ行音」の表記

巻分け	原　刊　本　式	倭　語　類　解　式	例数
A (1-4)	①くやうぐわん12　わが2　互いに5　事3　時宣2　違い2　上書1　ことごとく1　釘1　妨げ1　道具1　とが2 卵1 優れ1 やがて1 ちやくみぎり1　ちごうた1　次1　昼過ぎ1 ②が75(13)　上がる6　お陰5　いかが4　ながら4　限り3　いげ1　方3　儀3　りやうげん2　みぎ1　なにがし2　上げる1　りよぐわい1　難い1　申し上げ1　過ぎる1 (2)頃7　ごとく6　毎に6　りやうごく1　みやうご3　過ごす2 ③あかがね2		181
B (5-10)	(1)五10　かいごめ2　にごしらえ1　いとまごい1　筑後1　越後1　ぶこ（豊後）1　肥後1　とりごみ1 (2)頃8　ごとく8　毎に1　りやうごく3　みやうご6　過ごす1 (3)あかがね2 (計48)	①ふぎやうしゆ5　くつろげ5　仰せ上げられ5　不具3　日柄2　じぎ4　申しあぐる2　国々2　なが（長）2　急ぎ1　見苦しい1　漕ぎ2　すぐに1　かわるがわる1　かえすがえす1　ぎやくふう1　めいわくがり1　ちやくがん1　間違い1　東1　つなぎなわ1　げつ（月）2　とりまぎり1　じやうげ3　ねがわくわ1　従い1　とげ1　物語1　よもすがら1　みちすがら1　ろしすがら1　慰み3　加賀1　伊賀1　相模1　駿河1　ひうが（日向）1　郡56　不思議1 ②が39(4)　上がる9　お陰2　いかが13　ながら6　限り3　いげ3　方2　儀38　りやうげん1　みぎ2　なにがし3　上げる3　りよぐわい1　難い4　申し上げ3　過ぎる1 ③あかがね2	304
例数	229	256	485

＊A②、B②の（　）の数字は接続助詞「が」の例数

A②：B②にも現れるが，Bにおいては「倭語類解式」を採って現れるのに対して「原刊本式」を採って現れる語彙例。

A(2)：B(2)にも現れ，共に「原刊本式」を採る語彙例

A③：Bにも現れるが，Bにおいては，更に表記方式を異にする語彙例

B(1)：Bだけにしか現れないが「原刊本式」を採る語彙例

B①：Bだけにしか現れないが「倭語類解式」を採る語彙例

＜表2＞を見て，第一に注目される点は，Aの場合，「倭語類解式」をとった例は1例も存在しないということであろう。こういう事実を見て，直ちに言えるのは，Aの181例のガ行音の表記においての乱れはどこにも見あたらないということである。これを以って，まずAだけに限っての表記の統一性を考えたいのであるが，Bの方は，表記の統一性を失ったかのように「原刊本式」と「倭語類解式」が共に用いられている。Bにおいての表記例は「原刊本式」の場合48例，「倭語類解式」の場合256例を，各々数えることができるが，「倭語類解式」の方が，圧倒的に多いのに注意が引かれる。すなわち，Bにおいて大多数の語例を「倭語類解式」をとって表したにもかかわらず，48例に限っては，なぜ依然として「原刊本式」をとって表したのであろうか。ここに，重刊本においての不統一の理由があると思うが，その不統一の事情を理解する手がかりはBの「原刊本式」をとって表された語彙の性格から求めることができる。すなわち，A(2)・B(2)の「原刊本式」を用いて一貫して表記した語例を見ると，語彙の形態的な特徴として，濁音の部分が「ゴ」であるという事実が捉えられるのである。こういう事実は，B(1)においても全く同じである。これが，＜表2＞から注目される第二の点である。

＜原刊本式→倭語類解式＞の表記方式の変化の中で，語例群B(1)(2)の存在を側面から保証してくれる実例は，ほかならぬ，表記法の変化を受けた語例群B①②であるが，語例群B①②の中には，「ゴ」は，実際1例も存在しないのである。このように見れば，『倭語類解』の「ガ行音」の中で「原刊本式」をとっている8例のうち，4例が「ゴ」であるのも必ずしも偶然ではないかもしれない。重刊本の「ガ行音」の表記においての本当の意味での不統一のところを見出すとすれば，それは，アカガネの6例の場合であると思う。アカガネの6例は，A③・B(3)・B③に各々2例ずつ現れ，A・Bグループの中での相互関連性を失っている。アカガネ6例の場合は，一応例外として見ておくことにするが，残り479の「ガ行音」の表記例は巻のグループ化の中で，乱れのないある規範性に基づいて現れていることが分かる。ここにも「完書」たる重刊本の特徴があるのではないかと思うのであるが，その規範性を仮説的に言うならば，濁音の鼻音的要素が，失われていく歴史的な変遷の流れの中で，一番最後まで残ったのが「ゴ」であったことを意識した結果の現れではないかと推測してみる。ともあれ，「ガ行の濁音」については「ゴ」の存在を念頭に置いて考える必要があると思うが，「ガ行音」の表記方式の現れ方を見て，少なくとも重刊本の改修官の改修意識がある確実な方向性に基づいたものであったことは確かに言えそうである。

4 「御（おん）」「儀」の現れ方

次に，尊敬の接頭語「おん」が原刊本から重刊本にどのような関連性を持って現れているのかについて考えてみることにする。捷解新語には，本文の右側にハングルで音注が付

＜表３＞重刊本の「オン」

分	巻	受容例	新出例	計
A	1			
	2			
	3	1		
	4			1
B	5	1		
	6			
	7		10	
	8		2	
	9			13
C	10	3	5	8
計		5	17	22

されているが，その音注にたよって「御」の例を見ると，捷解新語における「御」は，「おん」「お」「ぎょ」「ご」として現れるのが分かる。その中で「おん」の場合だけに目を通して問題としたが，「おん」の例は，原刊本には72例，重刊本には22例が現れる。例数を見ると，「おん」は重刊本に＜72→22＞のように減って現れるのが分かるが，この事情についてもっと詳しく調べてみることにする。原刊本の「おん」が重刊本にどのように受け継がれているかを調べてみたのが＜表３＞である。

＜表３＞を見て，まず目にはいるのは原刊本の例が変化なしにそのまま重刊本に受け継がれている（受容例）例数である。これを見ると，原刊本の「おん」の例は，全体72例のうち，５例だけを残して，大半の67例は重刊本に現れなくなるのが分かり，こういうところから，「おん」の例の積極的に消されていく改修の動きを感じるのである。このような原刊本の「おん」の動きを考えながら，＜表３＞のように重刊本の「おん」の22例を調べてみると，原刊本の「おん」とは，また少しばかり異なった事情が見てとれるのである。すなわち，原刊本の「おん」の例の中で，変化なしにそのまま用いられた例は５例しかなかったが，その状況を重刊本の22例に重点を置いて解釈してみれば，重刊本の22例のうち，17例は，すべて新しく用いられた「おん」の例として見ることができる。

重刊本に現れた「おん」の22例の巻のグループ別の状況は，A１例，B13例，C８例であるが，A１例は原刊本から改修なしにそのまま用いられたものであり，C８例はその中で５例は新しく付け加えられたものではあるが，それが書きことばであるという点から，ACの９例は一応問題外とする。ここで注目されるところは，B13例である。Bグループの13例のうち，１例だけが原刊本から改修されることなく，そのまま用いられている例であって，他の12例は重刊本に改修の結果として新しく用いられたものである。本稿では，話しことばとしての＜おん＞の存在を意識して新しく用いたと思われる例すべてを含むというBグループの特徴を重視し，こういうところを問題としたいと思う。重刊本の「おん」においては，その語例を減らしていく傾向が強く現れているという状況の下にもかかわらず，また新しく用いられるという逆の傾向も強く現れるのである。

次に，重刊本においての「儀」の現れ方について考えてみることにする。「儀」の例は，原刊本には21例，重刊本には29例が現れる。巻のBグループの「儀」の現れ方にも「おん」の場合と同じく注目されるところがある。まず，原刊本の「儀」の21例をグループ別に見てみると，A０例，B９例，C12例のように，Aグループには１例も現れなく，原刊本でもAとBグループの間で「儀」の用い方には段差が認められる。重刊本の「儀」の例が原刊本とどのような関連性を持って現れているのかを調べたのが＜表４＞である。

重刊本においてもAグループには１例しか現れなく「儀」の用い方の傾向は原刊本の場

合と，大体同じであるが，Bグループで7例があらたに付け加えられている点が注意を引く。「儀」や「おん」の現れ方との共通性が認められるように思う。

<表4>重刊本の「儀」

分	巻	受容例	新出例	計
A	1			
	2			
	3			
	4		1	1
B	5		1	
	6	2	2	
	7		3	
	8	1	1	
	9			10
C	10	11	7	18
計		14	15	29

5　その他の語例の現れ方

重刊本の改修の結果を分析的に考察してまとめたとき，基本的に働いている改修の傾向に段差が見られ，その異なった傾向を巻グループの特徴として説明することができたと思うが，(注8) 巻のグループ化という観点に立って，ここでは「やうす（様子）」「まづ」「着く」の三つの語例の現れ方について述べてみることにする。「まづ」「着く」の場合は，韓国語訳の方を問題にしたが，まず「やうす（様子）」の方を見てみると，原刊本にA6例，B23例，C0例のように29例あったものが，重刊本には3例しか現れない。「やうす（様子）」の重刊本に至っての変化の内容は<表5>に示した。

原刊本の「やうす（様子）」の語例が重刊本にどのように変わったかその変化の内容を詳しく見ると，「削除」17例，「様子」3例，「様」1例，「事」2例，「儀」1例，「趣」2例，「御事」「段」「次第」各々1例のように多様に受け継がれている。その中で「やうす（様子）」がそのまま現れるのは3例しかなく，他は別の形をとってから姿を消している。しか

<表5>「やうす（様子）」

分	巻	削除	ヤウス	ヤウ	コト	キ	オモムキ	オンコト	タン	シタイ	計
A	1		1								
	2										
	3										
	4	2	2		1						6
B	5	6									
	6					1	1				
	7	6		1				1			
	8	2					1		1	1	
	9	1			1						23
C	10										0
計		17	3	1	2	1	2	1	1	1	29

＜表6＞「まづ」の訳

分	巻	原刊本			重刊本			
		A	U	計	A	U	備考	計
A	1	4(2)			2			
	2							
	3	1(1)						
	4	3		8(3)	3			5
B	5	5(1)			1	3		
	6	3(1)				2		
	7							
	8	1(1)						
	9	1		10(3)	1			7
C	10	4(1)		4(1)	1	2	1(1)	4(1)
計		22(7)	0	22(7)	8	7	1(1)	16(1)

＊「原」の（ ）は削除、「重」の（ ）は添加の例数である。

も重刊本の「やうす（様子）」の3例はグループAに限られており，逆にグループBの方は「やうす（様子）」の語例を積極的に避けた結果を見せていて興味深い。(注9)

「まづ」の韓国語訳としては，「acik」と「uisyən（為先）」の二語が当てられているが，原刊本の場合は，「acik」だけが用いられている。その状況は＜表6＞のとおりである。

原刊本の巻10には韓国語訳がなされていないため，便宜上「A（acik）」の方に入れたが，原刊本では「uisyən（為先）」を以っての訳は1例も現れない。それに対して重刊本には，「acik」8例と共に，「uisyən（為先）」として当てられた訳も7例が見える。「uisyən（為先）」は「acik」に対する漢字語であるが，参考として改修本においての「まづ」の訳を調べてみると「uisyən（為先）」は巻10に2例あるだけで他は原刊本と同じく「acik」となっている。また，「uisyən（為先）」が巻10に限定されて現れているところを見て，ある程度は書きことばとしての「uisyən（為先）」の性格を摑むことができると思うが，この「uisyən（為先）」が重刊本になって巻グループBにも現れるようになるのである。しかし，グループAには，依然として「acik」だけを以って「まづ」の訳に当てている。重刊本の巻10の添加の1例は「acik」の同義語「moncyə」になっていて例外的である。(注10)

「着く」の訳も「まづ」に似ている状況から現れる。「着く」の韓国語訳としては，「pwt'ta（つく）」「kata（いく）」「ota（くる）」の三語が当てられているが，原刊本の場合，「着く」の22例の中，17例が「pwt'ta」として現れているため，この「pwt'ta」の方に焦点を当てて「pwt'ta」（＋P）と非「pwt'ta」（—P／「kata」「ota」）がどのような状況から重刊本に現れるのかを＜表7＞に示した。巻10は「原（10－22）つき申候→重（中21ウ）ちやくいたし」の1例であるが，原刊本には訳がなく，また重刊本では別の語形式（ちやく

＜表7＞「着く」の訳

分	巻	原刊本			重刊本			備
		＋P	－P	計	＋P	－P	計	
A	1	3			3	1(1)		
	2		1(1)					
	3							
	4			4(1)			4(1)	
B	5	4				4		
	6	2(1)				1		
	7	2(1)	3(1)			3		
	8	6	1(1)			6		
	9			18(4)			14	
C	10			0			0	1
計		17(2)	5(3)	22(5)	3	15(1)	18(1)	1

＊「原」の（ ）は削除、もしくは別の語形式に変わったもの、
「重」の（ ）は別の語形式から変わったものの例数である。

いたし）に変わっている例であって，「備」として区別した。

原刊本と重刊本における「着く」の訳を分析してみると，原刊本の場合は，「pwt'ta」17例，非「pwt'ta」5例のように「pwt'ta」の方が基本になっているが，重刊本の場合は，その基本が逆になって訳されている。すなわち，「pwt'ta」3例，非「pwt'ta」15例のように非「pwt'ta」の方がより重点的に用いられているのが分かるが，しかも，グループBにおいて集中的に用いられている(注11)。また，グループBには，「pwt'ta」としての訳は1例も存在しないということからも韓国語訳の基準においても巻グループによる異なった傾向が働いているのを窺わせる。

6 まとめ

以上，重刊本における日本語の受け入れ方の一端について，「が行音の表記法」「おん」「儀」などの現れ方を通して調べてみたが，結果として，ことばの用い方の傾向に差が認められる。内容の削除，添加，もしくは終わりの段組などから概観できる傾向の差を巻グループの特徴の一つとして考え，巻のグループ化を試みながら，「が行音の表記法」「おん」「儀」の現れ方について調べた結果，特に，「が行音の表記法」においては，AとB・Cグループとの間で一線を引くようなはっきりした傾向の差をまとめることができる。「おん」の場合，その語例が大きく減る反面，また新しく用いられた例が頻出するが，その新出の例は，Bグループに集中して現れる。「儀」においても「おん」の場合と同じ傾向を確認することができるが，「が行音の表記法」「おん」「儀」の現れる傾向から，AとB・Cグルー

プとの区別，もしくはBグループの他の巻グループとの区別の必要性が生じる。

巻グループ間の傾向の差は，たとえば，一方では守っていく方針が働いている反面，他方では変えていく方針が働いている（「が行音の表記法」の現れ方），または一方では減らしていく方針が働いている反面，他方では増やしていく方針が働いている（「おん」「儀」の現れ方）といった二つの異なった方向として確認されるが，二つの異なった方向のうち，ある一方に基準を置いて他方を眺めてみると，そこには別の意識が働いているのが分かる。結局，その別の意識が存在するというところから異なった傾向が現れるのであるが，巻のグループ化という観点に立って「やうす（様子）」と「まづ」「着く」の韓国語訳の現れ方についても調べてみたように，重刊本においては，意識的なもう一つの方向を念頭に入れてのことばの考察が必要であると思う。巻9は，内容上の特性からは，Aグループとして区別されるかもしれないが，「が行音の表記法」の場合の傾向を重視し，また，話しことばであることを考慮して，Aグループと巻10から分けて一応Bグループとして区別する。従って，重刊本は言語現象の面からも，A（巻1～巻4）・B（巻5～巻9）・C（巻10）の三つのグループとして区別されるわけであるが，これが言語資料としての重刊本のもう一つの姿ではないかと思うのである。

＜注＞

（注1）本稿は，捷解新語の諸本を一般的な呼称に従って，『捷解新語』＝「原刊本」，『改修捷解新語』＝「改修本」，『重刊改修捷解新語』＝「重刊本」，『捷解新語文釈』＝「文釈」のように呼んでいる。また，『改修捷解新語』が世に現れる前までは，『重刊改修捷解新語』を「改修本」と呼んでいたことを参考までに付け加えて置く。安田章（1987）p1　参照。

（注2）従って巻9の場合は，終わりの「国尽くし」の部分は比較の対象から外す。

（注3）安田章（1960）p25。

（注4）安田章（1960）p26。

（注5）安田章（1960）の整理の（Ⅰ）の方式。

（注6）安田章（1987）p14。

（注7）『倭語類解』の成立は「1693年以後の十余年間」と推定されている。＜京都大学文学部国語学国文学研究室編（1960）p55。参照＞

（注8）巻グループによる異なった傾向を確認した上では，つぎにその傾向の差がどういう理由から起こった結果であるのかを考えなければならないであろう。安田章氏は，重刊本にいたる改修の一つの流れについて『第一次改修時に採られた新機軸，つまり，節目設定は，会話の場面を公的なものとして規定し，内容・表現，更には文体に至るまで，一定の枠をはめることに，また，主客表示は表現に対する立場，更に言えば表現の規範を明確にすることに，それぞれ通ずる措置であった。（中略）第一次改修本が，私的な話柄をも持つ原刊本の構成を継承する限り，公私の共存という矛盾を抱え込まざるを得なかった。第一次改修時に，「請改子童衣服」（巻五）「振舞時請若衆躍」（巻九），「島主餞宴請鮮樂」（巻八）と節目を一度設定しながら，第二次改修時に，削除または変更したのも，右の矛盾の解消という観点で論ぜられなければならない。（1990　p134）』のように述べておられるが，たとえば，「私的なもの→公的なもの」という改修の流れから巻グループの異なった傾向の存在を再考してみると，その傾向は，結局「公的なもの」を違う観点から扱った結果として解釈することができると思う。そして，「公的なもの」に対する違う観点には，その内容が持っている場所の違い，すなわち，「釜山」（巻1～巻4，巻9，巻10）と「釜山―江戸」（巻5～巻8）との違い，もしくは，内容そのものの違い，すなわち，「公貿易，日常に関する対話」（巻1～巻4，巻9）と「通信使行に関する対話」（巻5～巻8）との違いな

どが背景として入り込んでいるであろうと思うが，巻グループによる傾向の差の現れた理由についての追究は，今後の課題である。

〔注9〕削除の例は17例あって「やうす（様子）」の29例の半分以上を越えているが，その17例の削除の過程を見てみると少し注意を引くところがある。削除の過程は改修本を原刊本と重刊本の間に置くことによってある程度察することができるが，「やうす（様子）」の場合の削除例を段落の単位で行われた全体的なものと段落の内部で行われた部分的なものに分けて調べてみると，⑴全体的な削除12例「（4－29ウ）（5－12ウ）（5－26ウ）（5－29）（7－8）（8－12）（5－4ウ）（5－28ウ）（5－30）（7－12ウ）（7－12ウ）（7－18ウ）」⑵部分的な削除5例「改修本の段階で行われたもの（4－22）（8－26ウ）（9－14），重刊本の段階で行われたもの（7－2）（7－21ウ）」のようになる。その中で⑴の場合を更に分けてみると，①「やうす」の語例そのままで残っていたもの「前6例」②改修本の段階ですでに手が加えられていたもの「後6例／→わけ（5－4ウ），→おもむき（5－28ウ），→部分削除（5－30），→こと（7－12ウ），→おもむき（7－12ウ），→部分削除（7－18ウ）」のようになるが，重刊本のグループBの方は，結果的に「やうす」の語例を避けていることになっているところから見れば，「後6例」においては確かに重刊本の傾向にあっていて，まず問題はないと思う。しかし，「前6例」のうち，グループBの例の5例の場合は，一応重刊本の傾向とは反した姿で存在していて，ある問題が秘められていそうな感を捨てることができない。重刊本と共通する傾向が一部では流れているにも関わらず，改修なしにそのまま残した理由も追究しなければならないと思うが，これは，今後の課題である。

（注10）この巻10の添加の1例（上5ウまつさうさう　かくのことくに御さ候）は「moncyə」を以って「まつ」の訳に当てた唯一の例であるが，現代語としての「acik」「uisyən（為先）」「moncyə」の三語の意味を調べて日本語と対応させてみると，①「acik／マダ」②「uisyən（為先）／マズ」③「moncyə／サキニ，マズ，マエモッテ」（安田吉実，孫洛範共編1983　参照）のようになって，「acik」の場合は，意味上の変化（マズ→マダ）が見られる。「acik」と「まつ」の意味のずれがいつ，どこから生じたか，その背景も追究しなければならないと思う。

（注11）非「pwt'ta」，すなわち，「kata」「ota」のグループBの場合の14例を分けてみると「kata」2例，「ota」12例のようになるが，結局，ほとんどが＜「pwt'ta」→「ota」＞として改修された結果になって，もっと詳しい考察が必要なところである。語義までを念に入れての分析は，「acik」の場合と合わせて，今後の課題としたい。

＜参考文献＞

安田章（1987）「捷解新語の改修本」『国語国文』56－3

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1958）『倭語類解』京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1960）『重刊改修捷解新語』京都大学国文学会

安田章（1990）『外国資料と中世国語』三省堂

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1972）『三本対照捷解新語　本文編』京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1973）『三本対照捷解新語　釈文・索引・解題編』京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1987）『改修捷解新語』京都大学国文学会

安田章（1960）「重刊改修捷解新語解題」（京都大学文学部国語学国文学研究室編（1960）『重刊改修捷解新語』所収）

浜田敦（1970）『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店

浜田敦（1983）『続朝鮮資料による日本語研究』臨川書店

安田章（1980）『朝鮮資料と中世国語』笠間書院

森田武（1985）『室町時代語論攷』三省堂

安田吉実・孫洛範共編（1983）『エッセンス韓日辞典』民衆書林　ソウル